

2007年1月10日

人間科学研究科長 殿

川上 祐美氏 博士学位申請論文審査報告書

川上 祐美氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委託をうけ審査をしてきましたが、2007年1月9日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1. 申請者氏名 川上 祐美
2. 論文題目 見返りを期待しない利他行動における共感の意義
— 奉仕活動の動機から考える —

3. 本文

申請者川上氏は、3年以上にわたるホスピスでのボランティア活動を行った間に、献身的に他者のために尽くす人々に、しばしば見返りを期待しない利他行動が見られることに気づき、その動機を知りたいという意図から、本研究のテーマに取り組んだ。しかし、一方において、さまざまな人間関係や社会活動において、見返りを期待する利他行動がきわめて多いことは明らかである。そこで、見返りを期待しない利他行動には、その動機として宗教的背景や倫理規範、あるいは苦しむ者に対する強い同情・共感があるのではないかと考えた。このことを確認するために、献身的に奉仕活動を行っている修道士や出家者と一般のボランティアを対象に、奉仕活動の動機に関するインタビューを行った。その結果、一般のボランティアには自己の向上のような見返りを動機として挙げる者が多かったのに対して、家庭を持たずに献身的に奉仕活動に専念する修道士や出家者は、奉仕活動に見返りを期待せず、その動機としては宗教的背景や倫理規範よりもむしろ、苦しむ者への強い共感があることを確認した。

利他行動がなぜ起こるかという疑問に関しては、道徳哲学などにおいて古くから多くの見解がある一方、血縁選択や互惠的行為として説明しようとする進化生物学的な説明もある。自個体の子孫を残すことなく他個体のために活動する場合としては、ミツバチのワーカーなど多くの例があるが、進化生物学的説明としては、自個体と共通の遺伝子を残すのに貢献する場合にしか当てはまらない。しかし、人間の利他行動においては必ずしも血縁者が対象とは限らないので、進化生物学的説明だけでは不十分である。また、さまざまな宗教的、文化的背景の人々に共通に見られることから、特定の文化に偏った行動形態だとは考え難い。したがって、見返りを期待しない利他行動は生得的であって、しかも人間に固有な性質であろうと推論した。そこで、見返りを期待しない利他行動を行う性質がなぜ人間においてのみ進化したかという問題が生ずる。川上氏はこの疑問に対していまだに説得力

のある説明が与えられていないことを指摘し、従来の道徳哲学および進化生物学の枠を超えた独自の仮説を導いた。

ここで提起された仮説は、人間が他の動物にはない強い共感をいだける遺传的性質を獲得するに至ったことを説明するものである。その要点は、人類の祖先が、後天的に得た知識を子孫に伝えるという意味での文化ことに言語を獲得したことにより、他者から伝達された事柄を、自分の体験と同様に感じ取ることによって、他者の経験をも生きる知恵として活用することが可能になったと考えることである。その過程において強い共感が知識の習得を促し、その結果として生きる知恵の蓄積としての文化が発展していったと推論した。もし他者の経験によって有効な学習がなされるなら、自己の経験よりはるかに多くのことを学ぶことが可能になり、必然的に生きる知恵の蓄積として文化が発展していったと考えられる。このように、遺传的性質の進化と文化の発展が同時に進行するのは、いわゆる遺伝子と文化の共進化であり、文化の出現から人類の出現に至る期間に起こった事柄だと考えれば、唯一文化を持った動物である人間のみが強い共感を持つに至ったことを無理なく説明できることを指摘している。

この仮説の説明として、毒きのこを避ける知恵の獲得という例を示している。いま、先祖に毒きのこを食べて苦しんだ者がいたとする。その出来事が言語によって子孫に伝えられたとき、それを聞いた者が、毒きのこを食べて苦しんだ先祖の苦しみに対して、あたかも自分が苦しんだかのような強い共感を憶えるなら、自分自身の体験と同様に強く記憶に留められ、いつか実際に毒きのこに出会ったときに、命の危険を避けることができる可能性がある。この例からもわかるように、強い共感を示す性質によって、生きる知恵が世代を超えて継承され、生きて子孫を残すことに貢献しうることから、遺传的性質として進化しえたという説明が可能となる。

さらに一歩進んで、もし強い共感が人間に特有な遺传的性質であるなら、宗教教理や倫理規範に見られる利他行動の勧めは、人間本来の性質の反映にすぎないのではないかという疑問を提起した。それに対して、遺传的性質はつねに欠陥を生ずる可能性があり、また遺传的には正常でも発達障害などのために遺传的性質が正常に発現しない場合のあることに注目した。そして、障害の有無にかかわらず人間の行動を律するためには、遺传的性質に拘束されない行動の指針が与えられなければならないことを指摘し、そこに宗教教理や倫理規範の存在価値があるという見解を示した。このことから、強い共感が人間特有の生得的性質であり、その性質によって可能となった見返りを期待しない利他行動をさらに普遍的に実践することを可能にするために、宗教教理や倫理規範の意義があるという結論を導いた。そして、論文の末尾において、「現代の多元化社会における他者との関係において、文化や宗教間の違いによらない共感の性質があるとすれば、その性質をよりどころにして、宗教や文化の対立を超えた調和を追求する道があるのではないだろうか。」という指摘で論文を締めくくっている。

公開審査会において、利他行動の理解について進化生物学的な視点から考察を行ったこ

とおよび、奉仕者へのインタビューによって、献身的に奉仕活動を行っている者に強い共感が認められることを確認した点が評価された。しかし、インタビューの対象者数が12名であり、断定的な結論を導くには十分ではないとの指摘があった。この点については、一般的な調査の対象としては12名では少ないが、他の報告例との整合性が高いことなどからも、結論が妥当であるとの見解を付け加えて論旨を補足した。また、用語の使い方や概念の説明に不適切なところがあることも指摘された。ことに、宗教教理の説明や、説明に用いた事例などにも不十分な点があることが指摘された。それらの指摘に対しても論文が修正され、個々の指摘事項ごとに整理された対照表をもとに適切に改訂されたことを確認した。

本論文の新規な点は、(1) 献身的な奉仕活動を行う者に他者の苦しみに対する強い共感があることの確認、(2) 強い共感が人間にのみ顕著に見られることについて、文化と遺伝子の共進化によって獲得されたという説明を示したこと、および、(3) 宗教教理や倫理規範は、遺伝的性質に拘束されずに利他行動を促すことにおいて存在意義があることを指摘したこと、の3点である。このうち、(1) はすでに指摘されている事柄であるが、科学的な方法に基づいた客観的調査の例がみられないことから、たとえ限られた例数ではあっても、インタビューによって確認したことは有意義であったと考えられる。(2) については、これまでまったく指摘されたことのない考え方であり、新たな視点を示したことだけでも価値があると考えられる。(3) については、やはりこれまで見られなかった見解であり、新たな説明の可能性を示したとものである。

これらのことから、本論文はなぜ人間に顕著な利他行動が見られるのかという古くから多くの議論がなされてきた課題について、まったく新たな視点から取り組んだ意欲的な研究であり、その主張はおおむね妥当だと考えられ、細部にはなお若干の不十分な点が残ることは否めないものの、総合的に判断して学位授与に値すると判定した。

4. 川上 祐美氏博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学	特任教授	工学博士 (東京大学)	戸川 達男
審査員	早稲田大学	教授	博士 (人間科学) (早稲田大学)	蔵持 不三也
審査員	早稲田大学	教授	医学博士 (大阪大学)	今泉 和彦
審査員	早稲田大学	教授	Ph. D. (哲学博士) (Harvard University)	土田 友章